



1998年に始まった「介護等体験」は、教師をめざす人はすべて受講しなければならないことが、法律（小学校、中学校の普通免許状授与に係る教育職員免許上の特例に関する法律）によって義務付けられていることを皆さんは知っていますね。なぜ、始まったのでしょうか。教師として、指導力はもちろんそれ以上に人間性を求められたからでしょう。

私は、いくつかの大学で介護等体験の事前指導をしたことがあります。その指導の中で、必ず伝えることは、「介護等体験の目的」です。「高齢者や障害者に対する介護等の体験を義務付けることにより、人の心の痛みの分かる人づくり、各人の価値観の相違を認められる心を持った人づくりの実現に資する」と述べられています。

私がこの体験を通して学んでほしいことは、障がいのある人の困りに気づき、一人一人違った生き方や弱みがあることをしっかりと受け止め、ともに考えていくことができるようになってほしいと願っています。自分自身の生き方への価値観を変化させたり、再確認したりする機会にしてほしいと思っています。

私の「教師の三原則」

私は、教員研修などで先生方に時々話す「教師の三原則」があります。それは、昔私がお世話になっ

た恩師から聞いたことです。

師のお話は、「教師にとって一番必要なことは、『子どもがとことん好きか』ということだね。子どもへの愛情があるかということです。そうでないなら、教師になるべきではない」と言われました。「頼むからほかの職業を選んでほしい。なぜならそんな教師に学べば、一番に、子どもが不幸せになるからね。」

二つ目は、「『観る目』を持っているかということだよ。教師は、子どもの出す様々なサインを見逃さないようにすることが必要だが、そのサインを見逃さない目を持つということだよ。ただ、『見る』じゃないのだ、子どもに寄り添いともに悩み、心の背景まで見ることなので、敢えて『観る』を使ったんだよ」と言われたのです。

三つ目は、「『専門性』を持つことだよ。」その努力が必要だと言われます。「今までの経験上教師は、一旦教師という職業に就くと、日ごろの校務に追われ教師自身が学ぶことやめてしまう。ある新聞社のアンケート調査の結果を見ると、本をよく読む職業の順位が示されていたが、トップは営業マン、主婦、医者、と続く中、教師はベストテンにも入らず14番目に入るぐらいだそう。読書量だけで判断することではないが、いずれにしても教師の自己研鑽の必要性は高い」と言われ、教師自身が子どもに「示す・学ぶ」姿勢が大事だと言われます。

「愛情」「観る目」「専門性」の三つは教師として大切にしていきたいものです。

「教師への道」

大谷大学 文学部 教育・心理学科
教授 岩淵 信明

学校に保護者から厳しいお叱りの連絡が入ることがあります。「先生が子どものことを考えてないのです。子どもの話も聞かずに一方的に怒ったり、その時その時の自分の都合で子どもに注意したりします。」

「子ども同士のトラブルがあったのですが何があったのか、どんな指導をしていたのか連絡がありません。相手のお子さんの家から怒りの電話を頂いてびっくりしました。ちゃんと連絡していただかないと、最後は親同士のケンカになります。」

「授業参観に行きました。うちの子の机を見ると教科書を忘れたのか、肝心の教科書がありません。授業が終わるまで先生はそのことに気が付きませんでした。教科書を忘れたうちの子が悪いのですが、気付かない先生もどうかしていると思いませんか。」

このような指摘が少なくないようです。教員はどんなことに気を配らないといけないのか改めて考えさせられます。保護者から問題の指摘を受けるからではなく、子ども一人一人を大切にするにはどうしたらいいのか、子どもに愛情を注ぐとはどういうことなのか真剣に考えなければなりません。子どもから明るさや笑顔が消えるような指導があってはなりません。

中央教育審議会では、優れた教師の条件として次の三つをあげています。

①教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感などです。また教師は、変化の著しい社会や学校、子どもたちに適切に対

応するため、常に学び続ける向上心を持つことも大切です。

②教育の専門家としての確かな力量

「教師は授業で勝負する」と言われるようにこの力量が、「教育のプロ」のプロたる所以です。この力量は、具体的には、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級作りの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などです。

③総合的な人間力

教師には、子どもたちの人格形成に関わる者として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ、対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められます。また、教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体と協力していくことが大切です。

これら三つはどれも欠けても教師としての仕事を全うできません。教師はボランティアではなく、プロなのです。

優れた教師の条件に照らした時、保護者から苦情のあった教員の指導は、上記①、②、③の条件のどれもみんな外れています。

志高く教員になろうとするわけですから、言葉だけでなく、どうすることが子どもに寄り添うことなのか、学校ボランティアなどでその糸口をしっかりと学んでいくことが大切です。時折聞くのが、「あの先生の授業は面白いし、参観日が楽しみです。」という声です。きっと子どもたちは学ぶ喜びを感じているでしょうね。

教職への情熱、専門家としての力量、総合的な人間力をトータルで求められるのが教師です。教職を目指す皆さんの道は、子どもの喜ぶ顔を見たいとひたむきに学び続ける姿勢によって開かれていきます。

「ゼヒトモ教師」をめざす 3年生の皆さんへ

3年生の皆さんも、教員採用選考試験の時期はすぐにやってきます。いや、もうその時期にさしかかっています。教職アドバイザーやセンター内の素晴らしい資料も活用しながら、目標を定め、あせらず、計画的に、着実に準備、行動し、さらなる「確かな力」を身に付けてほしいと願っています。

皆さんの夢の実現のためにも、教職支援センターで実施する以下のような「セミナー」や「説明会」への参加を勧めます。『ゼヒトモ』参加してください！

1 面接セミナー（要事前申し込み）

1回目 8月2日（火）16:20～17:20⇒面接試験の目的と形式など
2回目 9月7日（水）10:00～12:00⇒面接試験の実践（個人・集団）

2 志願書記入説明会：地域別に4回に分けて実施（事前申し込み不要）

①志願書の持つ意味 ②自身の「教育観」を育てることの大切さ ③「自己PR」の作成 他

9月6日（火）14:00～15:30⇒京都市・その他
9月7日（水）14:00～15:30⇒京都府・堺市・豊能地区
9月8日（木）14:00～15:30⇒大阪府・大阪市
9月9日（金）14:00～15:30⇒滋賀県

大谷教師塾

歴史 4年 内本 武文

小学校3年生の時に会った担任の先生に、大きな影響を受けました。その頃から私は「教師になりたい」と考えるようになりました。大学に入っても、その思いは変わらず教職に関する授業は、無我夢中で履修してきました。六月には教育実習に行き社会科の授業を行いました。思っていたよりうまくいかず、授業以外の活動の多さもあり、将来の自分に不安も感じました。しかし、生徒と共に過ごした楽しさは忘れられず「生徒のためなら、何でもできる」と考える自分を宝に教師を目指します。

教育・心理 4年 奥田 萌

「よい先生」とは、どんな先生なのか？見い出せずにいました。悩む中、アドバイザーの先生の勧めもあり学校ボランティアに申し込みました。児童の明るい笑顔と元気に触れることにより「教師になりたい」思いは、大きく膨らんできました。ある日の放課後、一人の児童に「逆上がりができるまで一生懸命教えてくれて、ありがとう。」と言われました。私は、とても嬉しくて胸がいっぱいになりました。同時に、子どものためにと懸命に接していると、思いは必ず子どもに伝わっていることが解りました。それは、私の目指す教師像の一つでもあったので、改めて、「何事にも一生懸命」を目標に頑張ります。

教育・心理 4年 水籐 綾音

私には、憧れの先生から教わったことがあります。それは、「何事も一生懸命努力すること。やがて、その努力が自分自身を支える自信につながる」という内容です。先生と過ごした中で努力することの難しさ、辛さ、苦しさを知ることができました。反面、やり遂げる喜びや友との絆が生まれる嬉しさも味わうことができました。何度も何度も同じような経験を繰り返すことによって、人は大きく強く成長するのだと思います。今度は、私が教師として子どもたちに努力することの魅力を伝えていきます。そして、粘り強く行動できる子どもたちを育てます。そのために、今私は、教師になるための努力を一生懸命しています。そして、教師になります。

教育・心理 4年 黒川 佳那

「全教科、授業をしてみたいです。」教育実習の初日、担当の先生にお願いした。すると、10教科25時間も授業時間をいただいた。この貴重な経験から、「授業の創り方」や「授業中の教師の在り方」「発問の工夫」など多くのことを学ぶことができた。特に、特別支援学級での子どもと1対1の授業は、貴重な経験となった。生活単元学習として、手話を使ってお互いの自己紹介をする活動である。双方慣れない手話で、初対面の関係の中、意思疎通にお互いに苦労しながら、何とか授業を終えた。課題は多く残ったが、「子ども共に授業をつかった」と実感できた。一か月の実習から、「教師になりたい」という気持ちが強まったことには間違いはない。

教育・心理 3年 中川 純一

私は、学生ボランティアを通して「教師になりたい」という思いが、大きく膨らみました。三泊四日の自然体験学習で、活動する子どもたちの笑顔や純粋な心に触れたことが大きな理由です。この子どもたちに「私ができることは、何か？」と考えたのです。教師にとって大事なことは、子どもの思いを受け止め寄り添うことだと考えています。そして、子どもとの信頼関係を築き保護者・地域と協力して子どもを見守っていける教師になりたいです。教員採用試験まで、あと一年となりました。大学の勉強や学校ボランティア活動、採用試験の勉強などで忙しくなります。「教師にゼヒトモなる」という気持ちを忘れず一生懸命頑張ります。

『先生になるぞー』 ゼヒトモ教師 をめざせ！

教育・心理 4年 増本 奈緒

小学校の頃から先生になることは私の夢だった。優しく、時には厳しい先生に出会った。今でも、一緒に出かける親しい友にも出会った。新しい知識や大きく変化する自分に出会った。私は、学校でたくさんのすてきな人やものごとに出会えた。勉強も運動も苦手だった私が、それでも「先生になりたい」と思ったのは、そんな学校が大好きだったからだ。「どの子にも学校が好きになってもらいたい。」が、私の願いです。朝にはワクワクした楽しい気持ちで登校する。学校では、友だちと精一杯学び・遊ぶ。帰るころには、「今日も楽しかった。」とみんなが思えるようなクラスをつくりたい。そんな夢をかなえるために、私は先生になる。

歴史 4年 坂口 拓

教育実習を通して、生徒理解の大切さを学びました。担当の先生から「指導するうえで、一番大切なことは生徒理解である。」とアドバイスを受けました。思春期の中学生は、さまざまな悩みやストレスを抱えています。適切な指導をするためには、生徒との会話は欠かせません。会話は、理解に繋がることを実習から実感しました。生徒理解が進むと、授業構成や発問も変わってきます。実習の後半は、一人一人の生徒が存在感を出せる授業になったように感じました。将来、教師として、学習指導の力をつけると同時に、生徒指導力を身に付け深めていきます。

教育・心理 4年 梅本 晴香

私は、スクーリング・ケアサポーターとして小学校で学生ボランティアをしています。主な仕事は、不登校児童への支援です。不登校という現象は同じでも、児童によって原因や事情は異なります。そのために、個別の対応が重要です。私は、このボランティア活動から、児童一人一人の願いをしっかりと受け止め、細かな指導の必要性を学びました。この学びを生かして、教師として子どもを大切に活動をしていきます。

教育・心理 4年 佐伯 樹

学校ボランティアで実際に児童と関わっていると、「教師になりたい」という思いがますます大きくなっていく。「どの子にも、大きな夢を持たせ、進ませたい。」児童に接して、その様子からそう感じた。夢の実現のために、「挑戦する力」を育みたい。挑戦することによって、夢はふくらみ、意欲も増していくのだ。そのためには、それぞれの児童を知り、良さを伸ばしていくことが大切だ。それを授業でやりたい。子どもたちのそれぞれの良さを大切にしながら、子どもが活動できる授業を目指したい。そのことが、子どもの自信につながり「挑戦する力」に発展する。そして、私も挑戦する教師になる。

教育・心理 4年 辻 由貴

私は、小学校のころから、教師に憧れていた。たくさんの素晴らしい先生方との出会いは、憧れが目標に変わるきっかけだった。大学では、多くの学校でボランティアを経験した。一年生からは、キャンプリーダーをし、二年生からはスクールサポーターとして活動した。子どもたちと関わるごとに「教師になりたい」思いが増し、今では「絶対に教師になる！」と、強く思っている。夢から現実に向けて、走り続けてこれたのは、仲間や先生のおかげだと感謝している。一人では、絶対に頑張ることができなかった。採用試験まであと少し、仲間と一緒に走り続けたい。

教育・心理 4年 竹林 霞

「教師は、エンターティナーだ。」大学2年生のとき国語学習の先生がおっしゃった言葉です。子どもたちの好奇心をくすぐるためには、教師のアイデアやスタイルがとても大切になるということを教えていただきました。教育実習に行き改めてその言葉を痛感しました。どの先生方も独自のスタイルを持って、子どもと共に授業を創り上げていました。その様子を見て、教師に一番大切なことは、「自分のスタイルを持ち、子どもと協力して、常によりよいものを創る姿勢で学び続けること」であると、実感しました。私のスタイルは、何か。それは、自分の長所を生かして創りあげていくものだと思います。ユーモアあふれる、私らしい元気な教師を目指します。



歴史 4年 竹田 純生

教育実習を終えて、私は以前よりも「教師になりたい」という気持ちが、一層強くなりました。実習中、「生徒に解りやすい授業づくり」をめざし教材研究を重ねました。授業中、生徒は常に真剣なまなざしで学習に取り組み「解りやすかった」とか、「もっと詳しく教えて」とか言ってくれ、やりがいを感じました。逆に、「解らんかった」と教えてくれたり、担当の先生からも多くの指導を受けたりと反省もたくさん生まれました。しかし、それは次への「やる気」にも繋がりました。私は、実習を経て、生徒のことを一番に考えて授業づくりのできる教師を目指します。